

ある むぜお

府中市郷土の森博物館だより

al museo

2022年6月20日

No.140



郷土の森に移築復元された直後の旧島田家住宅。樹木は植えられて間もないため、背景に多摩川対岸の多摩丘陵がよく見える。

もくじ

- 1-2 復元建物、郷土の森に建つ
その5…旧島田家住宅
- 3 最近の発掘調査
東京競馬場構内の弥生時代前期の遺跡
- 4-5 NOTE
小金井桜と川崎平右衛門
- 6 展示会案内
企画展 文字から探る古代の府中
- 7 展示会案内
特別展 あしもとネイチャーワールド
府中いきものチャンピオン
- 8 多摩川今昔
①川を渡る手段
- 9 令和3年度寄贈・寄託資料一覧
利用状況 新刊案内
- 10 太陽系惑星ツアー
⑤ぐるっと木星アドベンチャー

復元建物、郷土の森に建つ

府中市郷土の森博物館には、現在8棟の建物が移築復元されています。小学校や役場・民家・商家等、江戸時代から昭和にかけてにつくられた特徴的なものばかりです。ここでは、各建物について移築復元された頃の写真でふりかえりつつ、それぞれの特色を8回シリーズで紹介します。

その5…旧島田家住宅

郷土の森（府中市郷土の森博物館の旧施設名）がオープンした翌年の1988年（昭和63）1月に撮影された旧島田家住宅です。フェンスで囲われたところは、後に復元される旧田中家住宅予定地です。現在では土蔵や母屋などが建ち、同じ撮影地点（旧府中尋常高等小学校校舎2階）からこの光景を見ることはできません。

復元建物、郷土の森に建つ

その5… 旧島田家住宅

府中市郷土の森博物館は、貴重な資料を収集保管する蔵であるとともに、その敷地は府中の縮図としての顔も持っています。このコンセプトに沿って、園内には歴史的建造物や府中市内の自然環境を残す浅間山や段丘（ハケ）、水田などが再現されています。今回紹介する旧島田家住宅は、旧府中町役場庁舎の隣の、旧甲州街道に見立てた道沿いに復元されました。

移築復元されたのは、1886年（明治19）から足掛け3年の歳月をかけて建築された店蔵部分です。移築前は薬局として大國魂神社の数軒隣にありました。この建物だけなら約20坪ほどですが、母屋や物置などを含めると解体時の敷地は約250坪の広さがありました。以前はさらに広い敷地だったといえます。

敷地内には同年代に建築された母屋が1967年（昭和42）までありましたが、店蔵移築時点の1980年代には建て替えられていました。店蔵についても近代化に伴いリフォームが施され、土壁は一部コンクリートで補強されていました。しかし、調査をしたところ、柱や基礎をはじめ多くの部分で建築当時の姿が残されていることが判明したのです。

それだけではありません。島田家には、この建物を建造した際の文書が残され、明治期における建築の実態を具体的に知ることができました。そこで、その情報を参照しながら建築当初の工法を用いての復元が可能と判断され、店蔵部分のみを郷土の森に移築保存することが決まりました。この建物の解体工事は1982年10月より1か月かけて行われ、郷土の森敷地内への復元工事がはじまったのは1985年2月のことでした。

基礎となる柱は解体した部材を中心に組み立てられました。壁は土を練り、熟成させるところから改めてやり直しです。柱と柱の間に、壁の骨組みとして竹を格子状に組んだ木舞と呼ばれる下地をつくり、そこに18cmほどの厚さの土を塗



明治20～30年代に撮影された島田家の様子。「島田薬舗」と記された看板が掲げられている。

りこみ乾燥させます。その後「むら直し」「中塗」など、材質の異なる壁土を、塗っては乾かし、塗っては乾かしを9回繰り返して、表面となる「黒ノ口」と呼ばれる黒い壁ができあがりしました。

分厚い土蔵造りの復元工事が完了したのは、郷土の森オープン後の1987年夏です。明治の新築時と同じく、足掛け3年をかけての完成となりました。

島田家復元工事は、明治時代の技術で建築当初の復元をこころみる機会であっただけでなく、復元を担当した職人たちにとっても、失われていく土壁塗りの技術を継承していく機会となりました。その意味では、府中の歴史だけでなく、職人の技術をも伝えた貴重な存在といえるでしょう。そしてそれを今後可能な限り保存していくことが、博物館の使命だと考えています。

（佐藤智敬）



竹を組んだ木舞に壁土とワラを練った荒壁を塗る作業

東京競馬場構内の

弥生時代前期の遺跡

日吉町一丁目 府中市ふるさと文化財課 湯瀬 禎彦



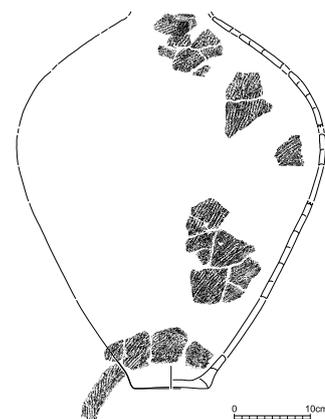
弥生土器片の埋設遺構

市内有数の広域施設の東京競馬場は、多摩川氾濫原の沖積低地に立地し、そこではふたつの弥生時代遺跡が発見されています。どちらも多数の土器と石器を伴った集落遺跡で、ひとつは弥生時代前期、もうひとつは弥生時代前期末～中期初めの遺跡です。最近、前者の隣接地で発掘調査を行ったところ、新たな発見がありましたので、その概要を紹介します。

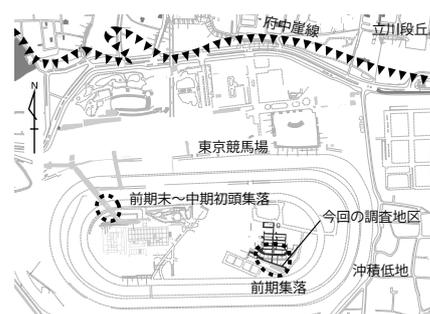
これまでの発掘では、東北南部や東海地方の影響を受けた土器や、水田稲作技術の伝播とともに各地に広がったといわれる遠賀川系の土器が出土している一方で、石鏃、削器、磨石、石皿といった縄文系石器もみられました。また、遺骸の埋葬後に骨を取りだして壺に納めた再葬墓といわれる墓（本誌No. 62）や、壺の破片を刺し重ねて埋設した何らかの儀礼の痕跡とみられる遺構（本誌No. 64）が検出されています。これらのことから、この集落では、狩猟・採集といった縄文時代的な生業が行われ、集落のなかには墓域と儀礼の場があったものと推測できます。さらに、この集落遺跡から出土した土器片6点にアワとキビの種実の圧痕が確認されたことにより、雑穀栽培が行われていた可能性も指摘されています。

最近の調査で新たに発見されたのは、多数の土器片を敷き詰めた特異な形態の土坑です。その性格については、覆土の分析で多数の稲の籾殻の痕跡が検出されたこと、および出土した土器片に籾の収納容器とも想定される一つの壺の破片が多く含まれていたことから、稲作に関係した儀礼の痕跡の可能性がありそうです。この新たな情報と遠賀川系土器が以前に出土していることを併せると、この集落では、雑穀の栽培のみならず、新しい時代の到来を象徴する稲作も生業に組み込まれていたと考えてよいのではないのでしょうか。

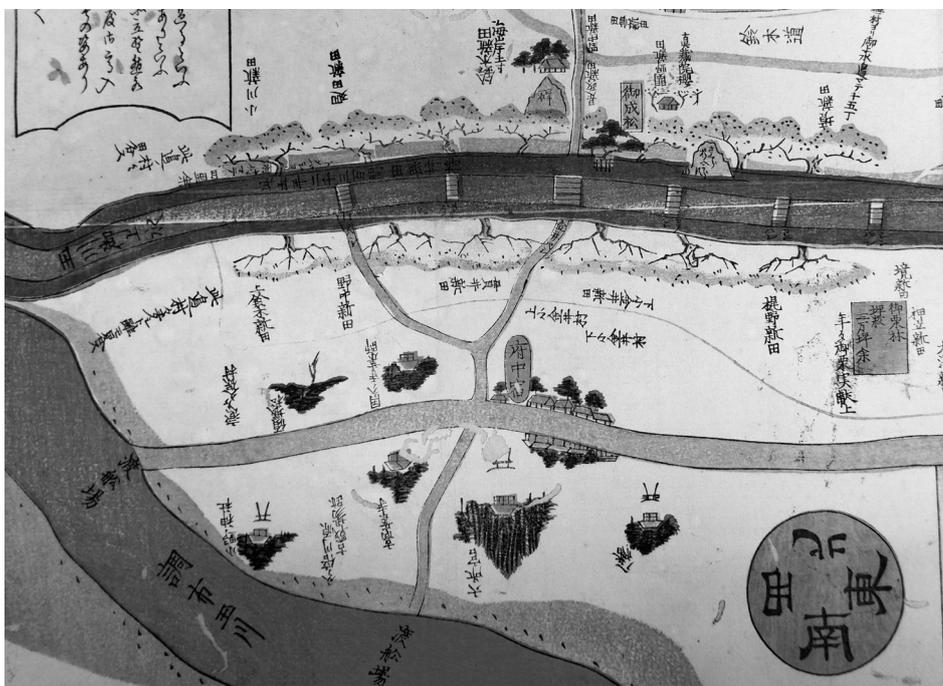
付近の発掘調査が進めば、弥生時代前期の水田遺構が発見される可能性も少なくありません。大いに期待したいところです。



埋設された壺形の弥生土器



遺跡の位置



小金井桜と府中近隣の名所・旧跡を描いた「武蔵野小金井桜順道図」(部分)

▼ はじめに

上の写真は、江戸から府中近隣へ向かうルート上の名所・旧跡を描いた、観光マップの一部です。六所宮（大國魂神社）や高安寺、国分寺などが見えますが、「武蔵野小金井桜順道図」という題名から、メインスポットは玉川上水堤に植えられた小金井の桜並木だとわかります。

この桜並木が、江戸の人びとに広く知られるようになったのは19世紀以降のことで、18世紀末頃までは「知る人ぞ知る」場所でした。寛政6年（1794）の実地調査を基に著された地誌『四神地名録』には、「江戸の近くなら人びとが群集するだろうが、賞する人もない」と評されており、花見客があまりいなかったことがうかがえます。一方、同9年の紀行文「府中六所詣」には「近頃人々の舌を流して、頗風流の酔客を招く」とありますし、文人画で有名な谷文晁は享和3年（1803）の20年位前に小金井での花見を勧められたと記していますので、一部の文化人には好まれていたようです。

これが文化5年（1808）に刊行された『仮名

略文 むさしの八景』では、「毎春都人行楽一方の名地」と、江戸の都市民が多く訪れる花見場所とされています。以降、小金井桜は様々な地誌や紀行文に登場し、天保14年（1843）や安政3年（1856）には、老中をはじめとする幕閣が遠馬で訪れるまでになりました。

▼ 小金井桜のはじまり

小金井の桜並木は、武蔵野新田のうち関野新田（小金井市）から上鈴木新田（小平市）までの玉川上水両縁約2里（約8km）に、大和国（奈良県）吉野と常陸国（茨城県）桜川の山桜が植樹されたことにはじまります。どの時代に、誰によって植えられたのか…、それについては享保の改革を行った8代将軍吉宗と大岡裁きで有名な大岡忠相の話から始めなければなりません。

吉宗の財政増収策をうけ、新田開発奨励の立札が日本橋に立ったのは享保7年（1722）のこと。この年、関東の農政を担当する役職として「関東地方御用掛」が新設され、江戸町奉行の大岡忠相と中山時春が任命されます（翌年に中山は退

任)。本来幕府領の農政は、勘定奉行の下で代官が担当しますが、関東地方御用掛がおかれた延享2年（1745）までは、それとは別に大岡支配の代官が存在することになりました。

享保17年から大岡配下として武蔵野新田を担当した代官・上坂安左衛門は、飢饉で困窮する村々の経営を軌道に乗せ得る人材として、押立村（押立町）の名主・川崎平右衛門に白羽の矢を立てます。元文4年（1739）、平右衛門は「南北武蔵野新田場世話役」に任じられ、その手腕を遺憾なく発揮しました。その業績が認められ、寛保3年（1743）、平右衛門は実質的な代官となるのですが、武蔵野新田に大きな足跡を残した彼こそが、小金井桜を植樹したといわれる人物なのです。

▼ 小金井桜植樹の目的

玉川上水の堤へ植樹した目的としては、根を深く張らすことによる地盤強化が考えられますが、その樹木に桜が選ばれた理由は何だったのでしょうか？

実は吉宗の治世下には、隅田川の堤や飛鳥山、品川の御殿山など、複数の桜の名所がつくられています。これらは吉宗の命によって群植されており、江戸の人びとに行楽地を提供するとともに、花見客が近隣にもたらず経済効果を狙ったものと推測されます。つまり、公共緑地となる桜の名所の新設は享保改革の一環で、これを郊外に適用したのが小金井桜だと言えるかもしれません。

そう考えると、桜を植樹したとされる平右衛門は、武蔵野新田の担当者として指揮をとっただけだった、とも思えてきます。事実、地誌類では、植樹を「台命」「朝命」によるものとし、八王子千人同心の小島文平は享和3年に記した文書において、内々に桜を好んだ吉宗の意をうけて大岡忠相の指図で植えられたと述べています。

一方、小平市の海岸寺にある文化7年建立の碑文のように「請うて朝命を承り」と伝えるものもあり、平右衛門の願い出をうけて許可が下りた可能性も否めません。彼の業績を考えれば、十分にあり得ることだと思えます。

ところで、真偽のほどは不明ですが、複数の地誌類で次のような植樹理由を見付けたので、紹介しておきます。それは、桜には「水毒」を浄化する働きがあるというものです。その花や実が水中

の不浄を取り除くと考えられていたようで、江戸の人びとが安心して玉川上水の水を飲めるように、桜が選ばれたというのです。効力の有無は「？」ですが、玉川上水沿いに植えられたがゆえの伝承と言えるでしょう。

▼ おわりに

さて、最後に小金井桜の植樹の時期について少し補足しておきます。それが吉宗の治世下に川崎平右衛門の指揮で行われたことは間違いありませんが、具体的な年代はわかっていません。前述の海岸寺の碑文には、元和2年と刻まれています。これは平右衛門が「南北武蔵野新田場世話役」になる2年前なので、少し早すぎます。地誌類は広く元文年間とするものが多く、『東都近郊図』（文政8年刊行）では、元文から延享（1744～48）にかけて年々植えられたとしています。平右衛門が武蔵野新田の担当を退くのが寛延2年（1749）なので、この記述通りだと在職中に植え続けられたこととなります。もっとも、植樹の本数は千本とも一万本（さすがに多すぎると思います…）ともいわれていますので、確かに単年では無理だったかもしれません。

平右衛門の下役だった押立村の高木三郎兵衛が晩年の覚書の中で「新田場の賑わいのため」と記した小金井桜は、目論見通り花見の名所となり、様々な浮世絵にも描かれました。大正13年（1924）には、「史蹟名勝天然紀念物保存法」により国の名勝に指定され、現在に続いています。今年はまだ間に合いませんが、来年の桜の季節、この並木の歴史に思いを馳せつつ、玉川上水沿いを散策してみたいはいかがでしょうか。



広重画「小がね井つつみの花盛」

文字から探る古代の府中

7/16 (土) ~ 10/30 (日)

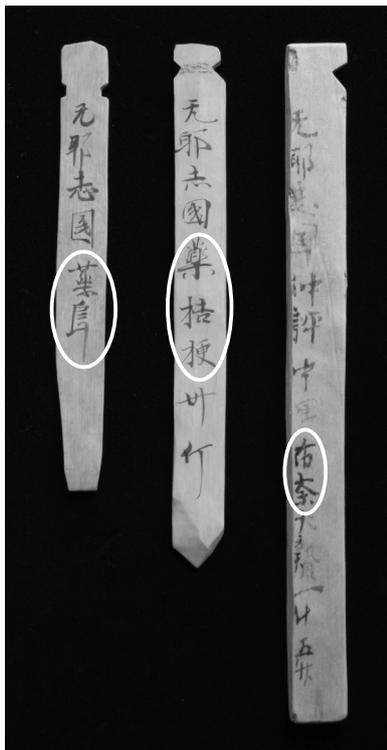
会場：本館2階企画展示室

当館の常設展示室「古代国府の誕生」コーナーには、墨で文字が書かれた土器や、文字がスタンプされた埴(レンガ)などが展示されています。これらは「出土文字資料」と呼ばれ、地中からみつかった考古資料のうち、文字や記号が確認できるものを指します。出土文字資料は1970年代以降、歴史研究において大きな役割を果たしてきました。『日本書紀』などの歴史書に記された事柄を検証する材料として、日本古代史をめぐる議論を活発化させてきたのです。

ここでは、出土文字資料のひとつ「木簡」(木製の札)をご紹介します。右の写真の3点は、武蔵国から都へ運ばれた特産品にくくりつけられたもので、伝票の

ような役割を果たしていました。これらの木簡からは興味深いことが読み取れます。まずは書き始めにご注目。いずれも「无耶志」とあります。この字は「武蔵」よりも前に使われていた「むさし」の表記です。「武蔵」という字は、和銅6年(713)に出された「国名などは好い意味を持つ二字で表記しなさい」という詔により決まりました。そして今でも地名や駅名などとして残っています。東京スカイツリーの高さも、武蔵にちなんで634(むさし)mに決まったというエピソードがありますね。

さて、もうひとつの注目ポイントは、都に納められた特産品です。写真の左・中央の木簡は、○で囲った部分をみると、いずれも「葉」に続けてそれぞれ「烏」「桔梗」と書かれています。「烏」は烏頭(トリカブト)のことでしょうか。右の木簡に見える「布奈」はあの魚のことでしょうか。



武蔵国から都へ運ばれた木簡(複製)

そのほか出土文字資料では、土器に建物や人の名前、まじないに関する文字などが墨で書かれているものがあります。個々の文字や記号がなにを意味するのか、なぜ土器に書かれたのかを解明することは容易ではありません。ですが、書かれている文字自体は現代の私たちがよく知っているものも多くあります。「酒」と書いてある土器もあり、どのような目的で書かれたのか気になるところです。

そもそも、なぜ紙以外のものにも文字が残されているのか?という素朴な疑問が浮かびます。どうやら古代の人びとは素材・製品の特徴や用途をふまえて文字を書いていたようです。たとえば、紙に

墨で書いた文字を消すのは難しいですが、木簡に書いた文字は消す(厳密には削る)ことができました。本展示会では、「なぜこれにこの文字を書いた?」という問いを持っていただけると嬉しいです。

当館では平成元年(1989)にも同タイトルの企画展を開催しました。今回の展示資料のなかには、当時すでに紹介した資料もあれば、のちに発見された資料もあります。約30年の間に進んだ調査・研究の成果をふまえて、選りすぐりの資料たちを展示します。武蔵台遺跡出土の“古代の漆紙文書”は3年ぶりのお披露目です。漆紙文書とはなにか…はぜひ想像していただき、展示会で答え合わせをしてみてください。

古代の人びとが文字をどのようにとらえ、どのように表現していたのか、皆さんと一緒に探ってみたいと思います。(石澤茉衣子)

あしもとネイチャーワールド 府中いきもの チャンピオン

7/17 (日) ~ 9/4 (日)

会場：本館 1 階特別展示室

「あしもとネイチャーワールド」・・・本シリーズは数えて 10 回目となる。ずいぶん長い間続けてきたな。身近な府中の自然を、あの手この手で趣向を凝らしつつ紹介してきたわけだが、ここで一旦まとめておこうと思うのだ。そもそも府中は、緑が後退する大都市東京の中において、自然を踏み留めている場所と言っている。何故なら市の南縁を流れる多摩川を筆頭に、市街地を横ぎる段丘崖や浅間山の雑木林など、特徴ある環境が整っているからだ。それぞれの環境に集まる様々ないきものを知り、府中の自然がどれ程豊かなのかを認識してもらう目的で本展を続けてきたのだ。過去を遡れば、毎回視点を変えて実に多様な足元の自然を見てきたことがわかるぞ。



「身近な昆虫の世界」(2010)、「冬鳥来訪」(2011)、「里山どうぶつ探検」(2012)、「多摩川にアユが帰ってきた」(2013)、「夏のいきもの甲子園」(2015)、「多摩川冬鳥の陣」(2016)、「オレたち夏のキラわれ者」(2017)、「渡る冬鳥大捜査線」(2018)、「多摩川左岸オールスターズ」(2019)・・・府中の昆虫に始まり、飛来する渡り鳥、近隣都市に出没する里山動物、多摩川魚類の水槽展示、都市を徘徊する迷惑動物等々、可能な限りわかりやすく説明してきたつもりだ。そして前回の「多摩川左岸オールスターズ」では、夏のいきものを勢揃いさせて、本シリーズの多摩川編を総括する形としたわけだ。

今回の展示は、シリーズの集大成、つまりは今までのあしもとネイチャーワールドを振り返っ



てもらおう中身となるだろう。前 9 本のそれぞれ主要部分をピックアップした内容を展示して再構成を図るのだ。もちろん、初めて見る者には府中の代表的ないきものをダイジェストで紹介する機会となるだろう。

自然が豊かな府中ではあるが、昔のままと言うわけではない。近年、里山や丘陵地を追われた野鳥や昆虫が市街地に新天地を求めて侵入したり、逆に市街地から多摩川などに根城を移す者もいる。その多摩川自体さえ、近年頻度が増した台風被害に対処するため、常に河川工事が行われ、環境が大きく変化している。当然そこに生息するいきものにも影響が及ぶのだ。開発が続く市街地の環境でも同様である。ゆえに各所で活動する連中にも主

役交代の事情がある。そこで、現在は何が府中を代表する種なのか・・・ひとつ探りながら府中のいきものを紹介していこうと考えているのだ。いきものを生態的・形態的に考察し、その場所で、その季節で、何が秀でているのかを見出してやろうと思うわけだ。ボクシングなら階級別に王者を判定するような遊びを混ぜつつ、身近な自然を学ぼうという試みだ。

市街地を含めた府中の各環境下に生息する代表的ないきものを再認識すると同時に、変化はすれども十分に活動可能な条件が府中に整っていることも併せて気付いてもらえれば幸いだ。本シリーズで扱ったスタイルでの「あしもとの自然」は、ひとまず一区切りとなるが、新たな形でまた参上するつもりだ。
(中村武史)

多摩川今昔

TAMAGAWA IMA MUKASHI

①川を渡る手段

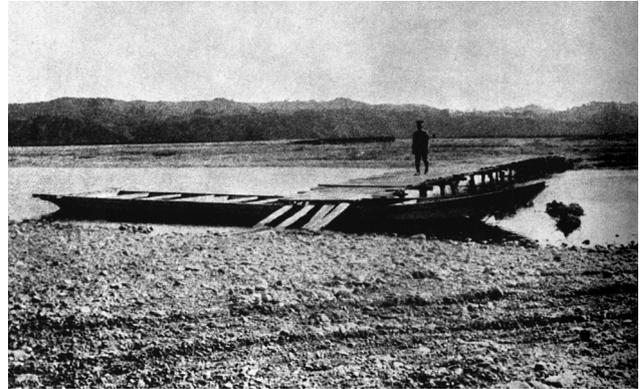
多摩川沿いに住む農家の多くは、対岸の多摩丘陵の雑木林まで堆肥とするための落ち葉を毎年のように取りに行っていました。薪をとるといった山仕事をするためにも、多摩川をひんぱんに渡る必要がありました。もちろん、それ以外にも商人など多摩川を渡る人は多くいました。

常時渡れる橋がなかった時代、多摩川を渡る手段は仮橋と渡し舟でした。雨が少ない秋から春の時期は多摩川の水量が少なく、小規模な仮の橋を架ければ、濡れずに歩いて渡ることが可能でした。雨の多い時期には仮橋が撤去され、渡し舟が運航しました。昭和初期の府中市域には一ノ宮（多摩市一ノ宮一四谷）、関戸（多摩市関戸一住吉町）、是政（稲城市大丸一是政）、常久（稲城市域の耕作地一小柳町）、押立（稲城市押立一押立）の5つの渡し場がありました。このうち常久の渡しは対岸に耕作に行く農家用で無料でしたが、それ以外は昭和初期で2銭ほどの乗船料でした。運航は渡し場のある地域が管理し、船頭は毎年入札で決まっていたといえます。

現在、府中市域の多摩川には、京王線・武蔵野線・南武線の鉄道橋梁を除くと、府中四谷橋・関戸橋・是政橋・稲城大橋の4つの橋があります。私たちはそれがあることが当たり前のようになっていますが、府中四谷橋の開通は1998年（平成10）、稲城大橋は1995年と比較的新しく、是政橋は1941年（昭和16）のことです。仮橋でなく、人が渡るために常設された初めての橋は関戸橋（旧橋・下流橋）です。1937年に完成しました。

この橋は片側一車線で、歩道もありませんでした。その後、1970年に渋滞緩和などのため、歩道も備えた新しい関戸橋（上流橋）が隣接する形で完成し、以降2本の橋が関戸橋と総称され、府中市と多摩市をつないできました。

しかし、その関戸橋はまた変化の時を迎えています。2016（平成28）年1月から、最初に架けられた旧橋の架け替え工事がはじまりました。



1921年（大正10）に撮影された関戸の仮橋
船も橋の一部としてつかわれている

2018年には仮設の橋が上流橋のさらに上流側に完成しました。それに伴い旧橋の通行が終了し、その後解体撤去されました。旧橋とほぼ同じ位置に改めて新しい橋が架けられる予定です。この工事は大規模であることはもちろんですが、安全面やアユの降下・遡上の時期等に配慮し、水量が少ない秋から春にかけてのみ実施されています。そのため工期が長くなり、順調にいても約16年かけて完了する計画となっています。工事完了予定は2032年頃。最低でもあと10年かかるようですが、それを楽しみに待ちたいと思います。

なお、解体された旧橋の銘板や高欄など一部分は、府中市側は中河原公園（住吉町）、多摩市側はろくせぶ公園（関戸）に保存されていますので、ぜひ見に行ってみてください。（佐藤智敬）



1956年（昭和31）当時の関戸橋

令和3年度
寄贈・寄託資料一覧

令和3年度
利用状況

No.	寄贈・寄託者 (敬称略)	資料名	分類	数量	受入
1	加藤 明	古文書・典籍類	歴史	一括	寄贈
2	島田 邦夫	稲荷宮棟札・寄進札	歴史	2点	寄贈
3	小澤 健	古文書・典籍類	歴史	一括	寄贈
4	千葉 成就	三億円事件情報提供用封筒・便箋	歴史	3点	寄贈
5	上村 雅一	古銭	歴史	9点	寄贈
6	秋元 良夫	醤油大安売り引札版木	歴史	1点	寄託
7	加藤 明	蚕神掛軸	民俗	1点	寄贈
8	小澤 健	御札	民俗	一括	寄贈
9	オリバラ実行委員会	2020 オリンピックパラリンピック関係資料	民俗	一括	寄贈
10	松林 眞澄	東京オリンピック関係資料	民俗	一括	寄贈
11	早川 佳男	早川歯科医院関係資料	民俗	一括	寄贈
12	荒井 寛	テープレコーダー・ラジオ	民俗	2点	寄贈
13	原 日出之	野鳥剥製標本(オナガ)	自然	4点	寄贈
14	塩尻 慎	大賀一郎書「蓮」色紙	大賀	1点	寄贈

区分	有料		減免 (障害者・ 4歳未満等)	合計	
	一般	団体			
博物館観覧者 開館日数 274 日	大人	132,044	798	44,000	176,842
	子供	12,319	5,092	37,003	54,414
	小計	144,363	5,890	81,003	231,256
上記のうち プラネタリウム観覧者 投映日数 183 日	大人	22,859	821	4,148	27,828
	子供	11,707	3,569	3,505	18,781
	小計	34,566	4,390	7,653	46,609

※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、4/25～5/31まで休館。
 ※本館天井改修工事のため、常設展示室・企画展示室休室。
 ※プラネタリウムは11/30まで日祝のみ(4/1～24、7/20～8/29の開館日は毎日投映)。定員は9/30までは100人、10/1以降は180人。

 新刊案内

* 『府中市郷土の森博物館紀要』35号 500円
 学芸員他による研究報告・論文集です。

- ・府中市東部地域の古代集落 [湯瀬禎彦]
- ・南関東における室町期瓦工の様態
 ー武蔵府中出土瓦を通してー [深澤靖幸]
- ・教科書に載った「くらやみ祭」
 ーその教材活用についてー [小野一之]
- ・天保・文禄期武蔵国多摩郡常久郷御縄打水帳について
 ー新たな二冊の検地帳の紹介を中心にー [谷口 央]
- ・〈研究ノート〉三田村鳶魚 晩年の大成経研究と徧無為
 三部神道の信仰について [野田政和]
- ・〈資料紹介〉屋根裏のお札群
 ー内藤清兵衛家発見資料よりー [佐藤智敬]

* 府中市内家分け古文書目録20
 『新宿 菊池家文書目録Ⅱ(1)』 300円
 府中三町のひとつである新宿の村役人や改革組合村の大惣代、捉飼場の野廻り役をつとめた、菊池家の史料群のうちから1,750件をCDに所収しました。

* 府中市郷土の森博物館ブックレット23
 『多摩川中流域を歩く』 500円
 府中および周辺が多摩川中流域自然地理ガイドです。おすすめの観察コースも紹介していますので、各所を巡る手引書としても活用できます。

※新刊は、本館1階ミュージアムショップにて発売中です

資料をご寄贈ください!

博物館では、府中に関わる資料を集めています。
 博物館に寄贈しても良いという方がいらっしゃいましたら、ご一報ください。

昭和40年代以前の家電製品／府中にかかわる古写真／養蚕や信仰にかかわる資料／府中で出土した土器や石器など



「あるむせお」は当館HPで閲覧できます!

No.1～最新号までをPDFで掲載しています。

※「あるむせお」の定期購読をご希望の方は、1年分の送料400円(切手でも可)を添えて、ミュージアムショップ受付カウンターでお申込みください。



太陽系惑星ツアー



⑤ぐるっと木星アドベンチャー

宇宙船「あるむぜお号」による太陽系ツアーも後半に差し掛かり、第5惑星の木星までやってきました。褐色や白の縞模様がメノウのように美しい木星ですが、岩石でできた地球とは違って、主に水素でできたガス惑星です。宇宙船の窓から見える、迫力満点の大きさに驚かれたことでしょうか。木星は太陽系の惑星の中では最も大きく、直径は地球の11倍、質量は300倍もあります。この大きな質量により引力も大変強く、小惑星や彗星の軌道をゆがめて自らに衝突させることも！1994年、分裂したシューメイカー・レヴィ第9彗星が木星に次々衝突して大ニュースになりましたが、その後の観測から5～20mサイズの天体は少なくとも毎月、木星へ衝突していると考えられています。

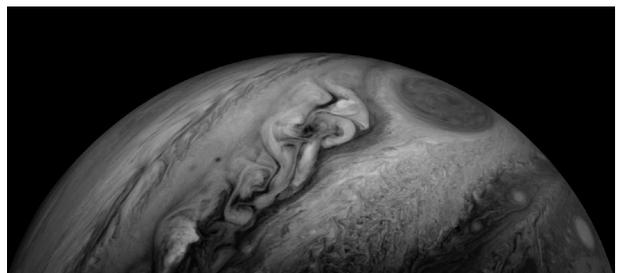
木星の周りには多くの月（衛星）が回っています。2021年12月1日現在で確定した衛星の数だけでも72個。中でも大きな、イオ・エウロパ・カリスト・ガニメデの4つの衛星は、ガリレオ・ガリレイが発見したことから「ガリレオ衛星」と呼ばれます。地球の月は1つしかないのに、時刻や日によって空に月が見えないことがあります。木星の空にはいつでもどれかしの月が見られそうです。

少しずつ木星へ近づいていきましょう。あ、お客様！宇宙船から出るなら防寒対策は万全にしてくださいね。太陽から木星までは地球の5倍も離れていて、表面温度はマイナス100℃以下です。

北極と南極にオーロラが見えてきました。運が良い時しか見られない地球のオーロラと違って、木星ではいつでも地球の100倍の強力なオーロラを見ることができます。大理石のような縞模様の上空に踊るピンクのオーロラは、木星ツアーの見どころの一つです。

木星を特徴づけている縞模様は、10時間で1周という木星の速い自転と、雲の変化のためにできると考えられています。近くで見ると繊細な渦が美しい模様を作っている様子も分かりますね。あ、赤くて大きな渦巻が見えてきました。こちらは大赤斑と呼ばれる、地球がスッポリ丸ごと入ってしまうほどの巨大な嵐です。太陽系最大の嵐とも言われ、最大風速は時速約650kmにもなります。強烈な風が吹き荒れる大音響はさまざま、この音波と重力波のせいで上空の空気が過熱され、1,300℃にも達しています。

もっと近づいて木星の中を通り抜ける、オブショナルツアー参加希望者はいらっしゃいますか？もしお客様が今の体のまま地球へ帰りたければ、ここで引き返すことをお勧めします。木星はガスでできていますが、フワフワ…かと思いきや、中心部は約2万℃、1,000万気圧と高温高圧の地獄のような場所です。固体のコアはあるものの、地球のような地面はないので着陸できず、強い重力で中心まで引き寄せられる間にどんな宇宙船も原子レベルまで細かくなって、木星と一体になれます。…今日の参加希望者はいないようですね。それでは次の土星へ向かいましょう！（相澤南美）



木星探査機ジュノーによりに撮影された大赤斑

撮影：2020年12月30日

Credit:Image data: NASA/JPL-Caltech/SwRI/MSSS Image processing: Navaneeth Krishnan S CC BY